

人・街・ながた 震災資料室ニュース

2007. 9. 17

発行人 寿 広文

編集人 武川泰恵・藤原美紀

JICA研修生と交流

9月1日(土)、発展途上国を中心とした防災担当職員研修(独立行政法人国際協力機構:JICA)事業の研修生10名が、研修の一環として当資料室に来られました。

皆さんは、インドネシア・パキスタン・スリランカ・トルコの各中央政府または地方政府の防災担当職員の方々に、8月27日から9月28日まで、1ヶ月にわたり防災福祉コミュニティの発信をテーマに県内を中心に随所で研修をされるということでした。

当資料室では、当時の広報課職員が撮影したビデオを見ていただき、続いて避難者分布の地図などを囲みながら説明をしました。

研修生の皆さんの国は、地震や津波の災害を受けた国ですので、熱心に耳を傾けていただき、特に「小学校」が主な避難所となったこと等に関心が寄せられ(諸国では学校が避難所としては考えられていないようです)時間いっぱい質疑応答が繰り返されました。

またその後はパネル等を見ていただき、インドネシアの研修生は避難所となった小学校体育館のパネルを見て「(避難者でいっぱい状況は)インドネシアも同じ状況でした」と言っておられました。ここでも、皆さん熱心に資料を見て質問を寄せられ、通訳さんだけでなく、私たちも拙い英語で対応しアットホームな雰囲気の中で、時間いっぱい見学していただきました。

国際的に防災について意識の高まる中、こういった形で外国の方と交流し、意見交換できることは私たちにとっても有意義であり、非常に勉強になった1日になりました。



秋の震災資料室展のお知らせ

日時 2007年11月21日(水)~27日(火)
9:00~17:00

場所 長田区役所 7階区民ギャラリー ほか

期間中は 土日祝日も ご覧いただけます。

お問合せ先

人・街・ながた震災資料室

☎078 (579) 2311 Fax078(579)2335

龍野和美さんより

カンパをいただきました。
ありがとうございました。

人・街・ながた震災資料室では、阪神淡路大震災に関する資料を集めています。ご協力をお願いします。

寄贈いただいた資料は保存し、公開させていただくことがあります。

震災による大火災と神戸空襲

4 回の国勢調査を比較して⑩

前号 (No 1 1 7) 新
長田駅前南の再開発
地区の火災の発生状
況について報告した
が、大震災に伴う火災
は長田区が圧倒的に
多いことに気づく。

《 火災被害状況

1995年(平成7)年1月17日~26日発生》

	火災總數 (件)	燒損延床面積 (㎡)	全燒 (棟)	半燒(棟)	部分燒 (棟)	ぼや (棟)
長田区	27	523, 546	4, 759	13	61	1
全 市	175	819, 108	6, 965	80	270	71

この疑問に対して長田（林田）の街が空前の発展を遂げたのは明治後期から大正時代で、大正7年には神戸市の人口は60万人になっており、三菱神戸造船所や川崎造船所が開設されていた。

長田区の前身の林田区も兵庫運河の完成後、東尻池村の人口は明治15年500人だったのが大正7年に5万人になっている。この頃、鐘紡兵庫工場・増田製粉所・東洋製粉・帝国製糖・鈴木商店の硬化油工場が区内に開設された。人口も大正元(1912)年36,261人が、14(1925)年には146,572人になっている。人口の増加に伴い学校も建てられていき、長楽小(大正5年)、真野小(7年)、長田小・御蔵小(9年)、神楽小(11年)、室内小(14年)、蓮池小(15年)が新設された。

震災後4ヶ月に及ぶ建物被害調査で明らかになったのは全焼・全壊した建物の多くは大正時代の建築で、基礎は煉瓦造り、壁はしっくい

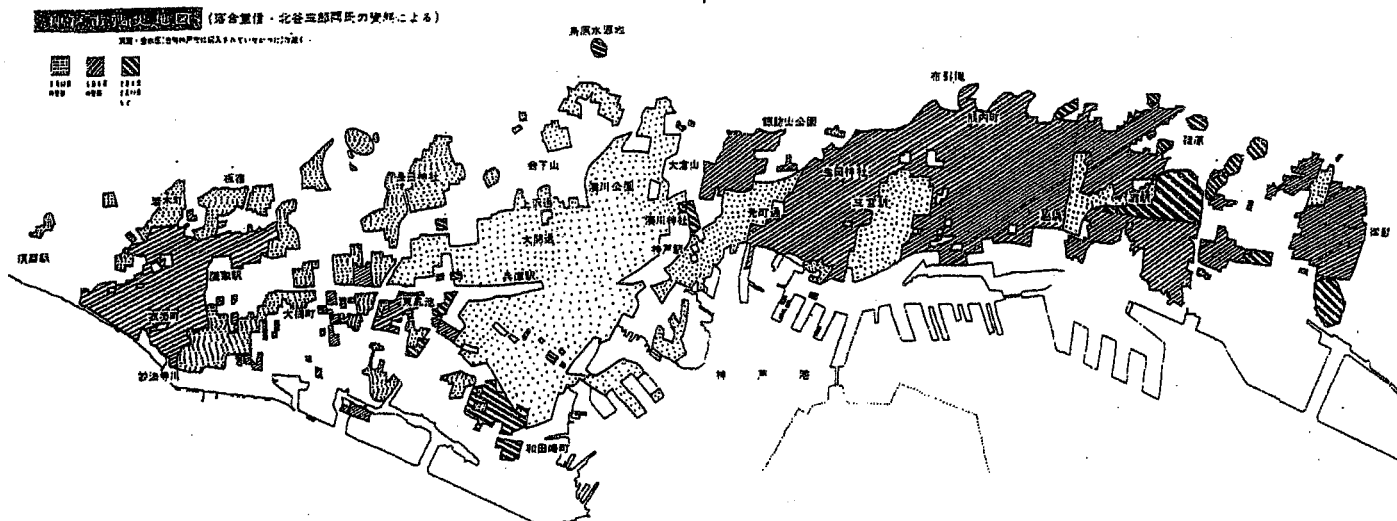
真かべで、屋根は瓦葺で棟続き（長屋建）であった。このことは、太平洋戦争時の空襲から免れた家屋が今回被災したということである。

『神戸空襲を記録する会』の中田政子さんは「大規模空襲は神戸の西半分が焼失した3月17日、B-29 306機による焼夷弾爆撃、川西航空機製作所への5月11日の空襲、そして6月5日、B-29 474機によるもので市域は全滅したが長田区は比較的残ったほうです」という。

(長田区役所は6月5日の空襲で全焼)

今回の震災で焼失した地域と空襲での被害を免れた地域が地図上で重なり合うことがわかった。また、大正時代に建てられた家屋は震災時まで建替えられることなく小規模な増改築がされた程度であった。

まさに「震度7」の揺れは建築後80年近く経った木造家屋を倒壊・炎上させたのだった。



神戸空襲を記録する会『神戸空襲体験記(特集編)』(のじぎく文庫、1975年)より